

## 出土術數文獻の研究

－『日書』と『周易』を中心にして－

### 学位論文内容の要旨

本論文は、近年、中國の戰國秦漢時代の墓地から出土した典籍、そのうち特に術數・占術に關係する出土文獻である『日書』（日取り・日選びのための日曆、及びそれに関連する各種占法をまとめた総合的占術書、後世の通書）と『周易』（いわゆる易經、及びそれに附隨する傳や注の總稱）を研究對象とし、その思想的特徴、文獻としての構造的特徴、及びその傳承の歴史的變遷などを明らかにしたものである。

序論では、新出土文獻の出現以降の術數研究史の回顧、及び現在までに確認できる出土術數文獻の解題を網羅的に詳細に行っている。

第一章「睡虎地秦簡『日書』における神靈と時の禁忌」では、擇日（日選び）の書である『日書』の日選びにおける禁忌について考察を行っている。神靈に由來する日の禁忌をその主體別に分類すれば、神煞・天神によるもの、祭祀對象になる神靈によるものの二種類に區分される。神煞・天神は祭祀の對象にはならず、禁忌を課すだけの存在であり、一方、祭祀對象になる神靈は人々に身近な神靈であり、人々の祭祀に應え福を降すが、その祭祀の日取りの禁忌を遵守しなければ禍を降す。本章では、かかる事實について、一、後世の通書との比較、二、宗教學におけるタブー研究の成果、を利用して『日書』における擇日の獨自性を検討し、『日書』においては、神靈に對する畏敬感に基づく原始的な態度が見て取れ、このことは『日書』が、後世の通書とは異なり、未だ通俗化・功利化・大衆化しきっていないことを意味する、と指摘している。

第二章「中國古代の神煞」では、前章で十分に議論できなかった神煞について考察を加える。神煞は、擇日において日の吉凶を判斷する際の根據として最も重視されている存在で、後世、神煞は二種類に分類される。一つはある行動を爲すのに良い日だとされる「吉神」、ある行動を爲すのに凶であるとされる「凶煞」である。本章では、出土術數文獻中に見える擇日に関する神煞を収集し、これらの神煞の中で、後世の凶煞と同一の存在だと考えられるものが多く確認されるのに對して、後世の吉神と同一の存在は一つも見つけ出すことができないということを確認している。これにより、戰國秦漢時代には吉神が存在せず、吉神という概念は漢代以降に發生したものである、と推測している。

第三章「『日書』における禹歩と五畫地の再検討」では、禹歩に関連した部分の先行研究を再検討する。睡虎地および放馬灘『日書』には、「禹歩」「呪文」「地を五畫すること（五畫地）」などからなる儀式（以下、「禹歩五畫地法」と稱する）を出行に際して行うことが見えるが、本章では、繼承の關係が不明瞭であった禹歩五畫地法から後世の速用縱

横法への流れを、種々の資料を用いて再検討し、『日書』の禹歩五畫地法→『北斗治法武威經』の天罡法（唐代中葉）→敦煌遺書P二六六一背の出行儀式・敦煌遺書P二六一〇等の出軍大忌日法（唐代後半）→『居家必用事類』に引く『趙氏拜命曆』の速用縱横法（一一九三年）→明清の通書・日用類書に見える速用縱横法、という流れが想定できるとしている。そして、結論として、『日書』の禹歩五畫地法は、一、後世文獻に見える類似の諸儀式と同じく、出行の凶日にどうしても出発しなくてはならない場合に行うもので、『日書』では、その凶日は、禹歩五畫地法の右隣に記載されている（出軍大忌日法の構成を根據にした推測）。二、出行の凶日に出行すれば、當然災いを受けるはずであり、それを豫め防禦しなければならず、そのため禹歩五畫地法では、複数の辟邪術（「禹歩」「五畫地」など）を組み合わせることで、その辟邪の效力を高め、それへの対策としていたもの、と考えられる。なお、禹歩は後世の儀式では行われなくなる。また、「五畫地」とは地面に×・+を描くことであり、後世、これが變化して地面に四縱五横を描くようになると推測している。

第四章「玉女反閉局法について」は、玉女反閉局法の專論である。この儀式については、日本の陰陽道研究において、陰陽道の反閉の始祖として、先行研究で紹介されているが、十分な考察はなされていない。本章はかかる状況に鑑みて、基礎的研究として、玉女反閉局法が見える文獻で古いものから四種を取り上げ、儀式次第の紹介と基礎的な校勘を試みている。また、従来、陰陽道研究において反閉（玉女反閉局法）に不可欠と考えられていた禹歩が、そもそもは反閉と無関係であった可能性が高いことを指摘している。

第五章『周易』蒙卦の一解釋では、上海博物館藏戰國楚竹書『周易』を利用して蒙卦の解釋について再検討している。楚竹書『周易』では、「蒙」を「尨」字に作る點に着目して、本章では、蒙卦は尨（むくいぬ）に関連した内容であることを指摘している。蒙卦卦辭（および六五爻辭）は犬の家畜化の由來譚、初六爻辭は牢獄の番犬としての犬、九二爻辭は犠牲としての犬、六四爻辭は犬の祟り、上九爻辭は犬を磔にして打つことによる災禍を防ぐ儀式について述べるもの、という解釋の可能性を示している。

第六章『周易』明夷卦初九爻辭の一解釋は、『周易』明夷卦初九爻辭の再検討であるが、その主眼は『周易』卦爻辭の「象」「占」について検討することにある。卦爻辭は「象」と「占」とで構成され、「占」は「象」に隱藏された意味を解釋したもの、と考えられる。本章では、その一例として、明夷卦初九爻辭が『詩經』に類似していることや近年の『詩經』研究の成果を利用して明夷卦初九爻辭を再解釋し、それによって始めて、この爻辭における「象」と「占」との関係性が明らかになることを示している。

第七章「阜陽漢簡『周易』の筮辭と卜辭」は、阜陽雙古堆漢墓竹簡『周易』における、筮辭部分と卜辭部分の関係性について検討を加えたものである。阜陽漢簡『周易』には、今本や他の出土『周易』には見えない卜辭部分が經文（筮辭部分）の後に附されている。本章では、この點について、その意味を考察し、卜辭部分の多くが、占った結果、ある卦辭・爻辭を得た場合の占斷を、その卦辭・爻辭の文面に則して解釋・解説したものであることを指摘し、卜辭部分の形式、漢代における「卜」字の用法の検討を通じて、阜陽漢簡『周易』の卜辭部分は龜卜とは関係ないものであり、『周易』の卦爻辭が實際に占いに用いるのに難解であったがために、後に注解として附したものが卜辭部分である、という見解を示している。

# 学位論文審査の要旨

主 査 准教授 近 藤 浩 之

副 査 教 授 佐 藤 鍊太郎

副 査 准教授 吉 開 将 人

学 位 論 文 題 名

## 出土術数文献の研究

－『日書』と『周易』を中心にして－

本論文は、近年、中國の戰國秦漢時代の墓地から出土した典籍、そのうち特に術数・占術に關係する出土文献である『日書』（日取り・日選びのための日曆、及びそれに關連する各種占法をまとめた総合的占術書、後世の通書）と『周易』（いわゆる易經、及びそれに附隨する傳や注の總稱）を研究對象とし、その思想的特徴、文献としての構造的な特徴、及びその傳承の歴史的變遷などを明らかにしたものである。「術数」とは、古代の科學知識、天文曆法などの類を包括する廣義の数の學術を意味し、近年の出土文献中における術数書の占める割合は、他のジャンルの書籍を大きく上回り、古代における術数の重要性を物語っているが、本邦では非科學・迷信に過ぎぬと見なされて敬遠され、基礎的な研究が著しく立ち遅れている分野である。

本論文は、『日書』に關するものと『周易』に關するものと、大きく二部に分かれ、第一章から第四章までがいわば第一部であり、睡虎地秦墓竹簡『日書』を中心に、『日書』という文献の中國古代文化における存在意義や位置付けを究明し、その特色を明らかにしている。特に後世の術数文献と比較した際の特色（相違點）に着目し、後世の術数文献との關聯を明らかにして、術数書の歴史的變遷を考察している。第五章から第七章までがいわば第二部であり、上海博物館藏戰國楚竹書『周易』と阜陽雙古堆漢墓竹簡『周易』を研究の對象として、經書としての『周易』ではなく、術数書としての『周易』の性質を明らかにしている。上海博楚竹書『周易』の卦辭・爻辭を再解釋し、訓詁的義理的な從來の解釋とは異なる占術的な解釋の可能性を示し、さらには、阜陽漢簡『周易』に特徴的に見られる、筮辭部分と卜辭部分の二つの部分からなる構成について、その關係を考察して、卜辭部分を筮辭部分を文面に則して解釋するものとなっていることを明らかにしている。

本論文は、すでに学会誌や紀要で發表された七つの論文を根幹として、その前後に新たに書き足した序論と結論を配する形で構成されている。

序論は、本邦にはこれまでなかった、術数書に關する網羅的総合的で詳細な解題で、當該研究領域において非常に有用なものである。第一章は、『中國出土資料研究』第九號（二

〇〇五年）に発表した論文で、祭祀対象になる神靈（祖先・五祀・職能神）と祭祀対象にならない神靈（神煞・天神）とを區別して考察することにより、『日書』の思想史的な位置づけを明らかにすることに成功している。第二章は、『二〇〇七年中日博士生學術研討會』（二〇〇七年）で発表した論文で、現在、出土術數文獻の『日書』には、後世の凶煞と同一の存在が多く確認されるのに對して、後世の吉神と同一の存在は一つも見つけ出すことができないということを檢證し、『日書』の思想史的特徴の一端を明らかにした。第三章は、『東方宗教』第一〇八號（二〇〇六年）に発表した論文で、禹歩五畫地法が「出行の凶日にどうしても出發しなくてはならない場合に行うもの」であることを檢證し、『日書』ではその凶日が禹歩五畫地法の右隣に記載されていることを指摘し、『日書』を起點とする禹歩五畫地法の歴史的變遷を辿った點も併せて、高く評價できる内容である。第四章は、『北海道大學大學院文學研究科研究論集』第六號（二〇〇六年）に発表した論文で、日本の陰陽道研究において反閉（玉女反閉局法）に不可缺と考えられていた禹歩が、そもそもは反閉と無關係であつた可能性が高いことを指摘した。第五章は『中國哲學』第三十三號（二〇〇五年）に、第六章は『中國哲學』第三十五號（二〇〇七年）に発表した論文で、いずれも、經書としての『周易』ではなく術數書としての『周易』の性質を明らかにするために、『周易』の卦辭・爻辭を再解釋し、從來とは異なる占術的な解釋の可能性を示している。第七章は、『中國哲學』第三十七號（二〇〇九年）に発表した論文で、先行研究ではまだ具體的な考察がなされていなかった、阜陽漢簡『周易』の筮辭部分と卜辭部分の關係について、九つの例を挙げ、卜辭部分の多くが、卦辭・爻辭をその文面に則して解釋したものであることを指摘している。卜辭部分は、龜卜と直接關係はなく、「象」と「占」から成る『周易』卦爻辭自體（筮辭部分）がひとつの難解な「象」と見なされたため、それを新たに解釋する「占」として卜辭部分が附加されたとの考えを示し、今後の『周易』の研究に新たな視點を提供したものとして高く評價できる。

総じて本論文は、これまで基礎的な研究が立ち遅れていた術數學の研究領域において、最も重要な二種類の文獻（『日書』と『周易』）について多くの實例を集めて比較檢證し、術數學的思想史的に重要な特徴を明らかにし、今後の研究の發展に寄與する方向性と示唆を與えるもので、博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものである。